

R.W. コンネルの男性性理論の批判的検討

——ジェンダー構造の多元性に配慮した男性性のヘゲモニー闘争の分析へ——

川口 遼

1 はじめに

日本における男性性研究の第一人者である多賀太は、ジェンダーについて、矛盾し対立するイデオロギーが共存する現代日本社会のあり方を「多元的変動社会」と評した(多賀 2001)。多賀のこの時代判断は1990年代半ばになされたものだが、その有効性は21世紀を迎えてからすでに10年以上がたった現在においても失われていないだろう。

ジェンダー構造とジェンダー実践の変容のなかでも特に近年注目されだしているのが、男性性の変化である⁽¹⁾。事実、1990年代から男性性の変容についての分析が積極的に行われるようになってきている。当初は、男性学の名の下、「男らしさ」からの男性の解放をめざす啓蒙活動としての色彩が強かったそれらの研究潮流も、近年では理論的、経験的な知見を蓄積するようになってきている。その際、頻繁に引用されるのがレイウィン・コンネルによる男性性の多様性と階層性をモデル化した理論である(以下、男性性の階層モデル)。多くの論者がコンネル理論に依拠した上で、かつて男性性間の階層関係の頂点にあったとされる「サラリーマン的男性性」、つまり大企業にホワイトカラーとして勤めながら、家事・育児のほとんどを担う妻と子どもを経済的に養うといった男性のジェンダー実践の、ヘゲモニーの揺らぎについて論じている(Dasgupta 2012; Hidaka 2010; 宮下 2006; Roberson 2005; 多賀 2006; 田中 2009)。

しかしながら、そのコンネルの男性性理論が、現代日本社会におけるジェンダー構造あるいは男性性の配置(configuration of masculinities)を分析する上で適切な理論モデルであるかどうか、十分な検討がこれまでなされてきたわけではない⁽²⁾。結論を先取りすると、コンネル理論は分析ツールとしての利得と同時に限界も抱えており、その限界は日本における男性性研究が抱える課題の源泉ともなっている。というのも日本の男性性研究は、男性性間の関係性やその変容を分析することはあっても、そのあり方がジェンダー構造全体の中で持ちうる意味を分析してこなかったと批判されてきた(川口 2007, 2011)が、この課題は実はコンネルにも共有されているからだ。

この問題関心のもと、本稿では、コンネルが提起した男性性理論が、現代日本社会を分析する上でもつ可能性と限界についてあらためて検討する。また、明らかになった限界を踏まえううえで、今後の経験的研究の展望を示す。具体的には、2章にてコンネルの議論を概観したうえで、彼女の理論が現代日本社会を分析するにあたってどのような利得と限界をもっているかを検討する。次に3章では、2章で指摘したコンネルの男性性理論の限界を乗り越えるために、男性性間の明瞭な階層関係を前提とせずに調査を行うことと、ジェンダー構造を多元的に捉えることが必要であると訴える。最後に、4章でこれまでの議論を要約した後に、今後の経験的研究の展望を示す。

2 コンネルの男性性理論の批判的検討

2.1 男性性理論とコンネルによる経験的研究の概要

2.1.1 男性性の階層モデル

コンネルは、これまで現代社会におけるジェンダーとセクシュアリティに関わる諸問題について包括的な理論的説明を試みてきた (Connell 1983, 1987=1993, 2002=2008, [2002]2009)。また、男性性の配置についても理論的、経験的な研究を行っている (Connell [1995]2005, 2000など)。

コンネル理論の特徴は大まかに言って2つあると考えられる。1つ目はそれが「日常行動にもとづく理論」(Connell 1987=1993: 112)であること、2つ目はそれがジェンダー関係を複数の構造ならびに次元から理解していることである (Connell 1987=1993, 2002=2008)。1つ目の特徴からはジェンダー関係の変動性が導き出されるのに対し、2つ目の特徴からはジェンダー関係の多元性が把握される。コンネルによると、それまでのジェンダーの社会理論は3つの限界を抱えている (Connell 1983, 1987=1993)。1つ目の限界は、「男/女」をカテゴリー的に捉えた二元論的説明にとどまっていることである。2つ目は、既存のジェンダー関係を規定する単一の構造的要因を想定していることである。3つ目は、既存のジェンダー関係が変容しうることを理論的に担保していないことである。コンネルの30年にわたる理論的営みは、このような限界を乗り越え、ジェンダーとそれ以外の社会構造によって条件づけられた人々の日常的なふるまいが、まさにそのジェンダー関係を再編成していく様相を把握しうる分析枠組みを打ち立てようとするものであったと言えよう。男性性の階層モデルは、以上のような理論的課題において、「男女」という二項対立から、さまざまな男性性ならびに女性性の間の関係へと議論の焦点をずらすという大きな役割を果たした (Connell 2002=2008)。

具体的に見ていこう。まず、コンネルは「どんなときでもある一つの形式の男性性が他の男性性よりも文化的に優位にある」(Connell [1995]2005: 77)として、これをアントニオ・グラムシの議論に依拠して「ヘゲモニックな男性性」と名付ける。一方、「従属的な男性性」は「男性集団のなかでの支配—従属の特定のジェンダー関係」(Connell [1995]2005: 78)において最下層に位置づけられているものを指す。次に「共犯的な男性性」は「家父長制の最前線部隊になることなくその利益配当を受けるような形で構築される男性性」(Connell [1995]2005: 79)、つまりヘゲモニックな男性性を体現せず家父長制の利益配当を受けるような男性性のあり方を指す。コンネルによれば、「(男性性の)ヘゲモニックなパターンを厳密に実践している男性の数は極めて少ない」(Connell [1995]2005: 79)にもかかわらず、多くの男性が「全体的な女性の従属から生まれる男性一般の特権」(Connell [1995]2005: 79)を受けている。そして、コンネルは「エスニック・マイノリティのような搾取あるいは抑圧された集団のなかで生み出される男性性」(Connell 2000: 30)を「周縁化された男性性」と呼ぶ。この周縁化された男性性は「ヘゲモニックな男性性と多くの特徴を共有しているが、社会的に脱一権威化されている」(Connell 2000: 31)点が異なる⁽³⁾。

さらに、コンネルは「ヘゲモニックな男性性」を「男性の支配的な位置と女性の従属的な位置を保証する(あるいは保証すると考えられている)家父長制の正統性問題(the problem of the legitimacy of patriarchy)に対する、現時点で受容されている答えを具体化するジェンダー実践の形態」(Connell [1995]2005: 77)とも定義する。つまり、コンネルにおいて男性による女性の

支配はある特定の男性性が他の男性性と女性性に対して文化的に優位にたつことを通じて達成されると考えられているのだ⁽⁴⁾。このことは、コンネルが現代（欧米）社会における「男性集団のなかでの支配—従属の特定のジェンダー関係」（Connell [1995]2005: 78）の代表例として「異性愛男性の支配と同性愛男性の従属」（Connell [1995]2005: 78）をあげていることから確認できる。コンネルは両者の関係について以下のように述べる（Connell [1995]2005: 79）。

ゲイネスは、家の装飾の厳格なセンスから肛門の喜びまでの、ヘゲモニックな男性性から象徴的に追い出されたものの宝庫である。それゆえ、ヘゲモニックな男性性の視点からは、ゲイネスは簡単に女性性として理解される。…正統性のサークルから排除される異性愛の男性や少年もいる。このプロセスは豊富な罵倒の語彙で印づけられている。…ここでも、女性性を象徴的に汚していることが明らかである。

ここで明らかのように、コンネルにおいて、従属的な男性性は女性性と関連づけられるものである。つまり、ヘゲモニックな男性性は男性間の支配と従属のみならず、男女間のそれをも指し示すものとして概念化されている⁽⁵⁾。

2.1.2 コンネルによる経験的研究

以上のような理論モデルを用いて、これまでコンネルは様々な形式の男性性について論じてきた⁽⁶⁾。特に1998年以降、グローバル化によって変容するヘゲモニックな男性性の様相について調査を行っている。コンネルは、国境を越えたグローバルな規模のジェンダー構造が登場としてこれを「世界ジェンダー秩序（world gender order）」と呼ぶ（Connell [2002]2008）。その上で「現代的なジェンダー秩序におけるヘゲモニーは、北側によって支配された貿易、投資、コミュニケーションのパターンと結びついている」（Connell 1998: 3）とし、「多国籍企業とグローバルな金融市場において制度的に基礎付けられているトランスナショナルなビジネスマン的男性性」（Connell 1998: 3）を世界ジェンダー秩序におけるヘゲモニックな男性性であるとする。この男性性は、男性による「権力と金銭を得るためのテクニックの占有」（Connell and Wood 2005: 361）に根ざしているという点では、かつての資本家的男性性との連続性を見せているが、「家庭内の家父長制、上流気取り、社会的権威、愛国心、宗教といった資本家的男性性の古い内実」（Connell and Wood 2005: 361）はほとんど受け継いでいなかったとされる。むしろ、様々な障壁が取り除かれた結果、グローバルな競争へと追い立てられることとなった彼らの人生には「利益を生み出すこと以外の論拠が存在しない」（Connell and Wood 2005: 361）とコンネルは言う。トランスナショナルなビジネスマン的男性性とは、「カネがかつてないほどの力を持つようになっ」（Connell and Wood 2005: 361）たグローバル化した経済と新自由主義的な政治という構造的条件に最適化した男性性であり、利益追求という目的のためには、自らの身体や感情すらもマネジメントの対象とするような男性性のあり方である。

2.2 コンネル理論の諸問題

2.2.1 多元的変動社会とコンネル理論

それでは、現代日本社会を分析する上で、この男性性の階層モデルはどのような利得をもって

いるだろうか。この論点を検討するにあたって、序章で示した時代認識を振り返っておきたい。

人々の意識のうち、20世紀の後半以降の日本社会においてもっとも大きく変化したものとして、ジェンダーとセクシュアリティにまつわるものをあげることができる。例えば、1973年から5年ごとに行われているNHKによる日本人の意識調査において、ジェンダーとセクシュアリティに関する項目がもっとも大きな変化をみせている⁽⁷⁾(NHK放送文化研究所編 2004)。またこの種の意識の特徴として、しばしば賛否が拮抗していることを指摘できる。例えば、性別分業についての2008年調査での賛否の割合も拮抗している(NHK放送文化研究所編 2010)。しかも、2003年調査から2008年調査にかけては、20代において調査以来はじめて性別分業に賛成する人々の割合が増加している⁽⁸⁾。このようにジェンダー・セクシュアリティにまつわる多様な価値が共存し、また複雑に変化している状況こそ「多元的変動社会」と呼ぶのにふさわしい。

男性性が複数の形式をとりうるとするコンネルの男性性理論はこの多元的変動社会たる現代日本社会を分析する上での利得がある。なぜなら性別分業の賛否が拮抗するということは、それぞれに対応した男性性のあり方、例えばサラリーマン的男性性と家事・育児と結びつけられた男性性が併存していることを意味するからだ。コンネル理論はまさにこのような複数の男性性の併存をうまく説明する。

しかしながら、コンネルの男性性理論でうまく説明できるのはここまでである。複数の男性性間の関係性に論点をうつすとその限界があらわになる。端的に言って、多元的変動社会たる現代日本社会における男性性間の関係性はコンネルが想定する以上に複雑である。次項以降では、この点に関連してコンネル理論における「男性性の階層関係の先験的な措定」という特徴と、それによって生み出される「男女間の関係性の後景化」という弊害について検討する。

2.2.2 男性性の階層関係の先験的な措定

コンネルは、理論的には、男性性間の階層的關係はそれぞれの男性性に対する人びとの意味づけによって決定されると主張している(Connell [1995]2005)。しかしながら、その経験的研究においては、男性性の配置のありようをジェンダー以外の社会構造から先験的に措定するという特徴がある。ジェンダー関係を規定する単一の構造的要因の措定という、自身が理論的に批判した過ちを彼女もおかしてしまっているのだ。以下、彼女の経験的研究に即してこの点について論じる。

コンネルは、『ジェンダーと権力』(Connell 1987=1993)においてはハンフリー・ボガードやシルベスター・スターローンが映画で体現するタフな男性像を、*Masculinities* (Connell [1995]2005)においては全米ライフル協会が体現するような力強さと銃保有を結びつけるような男性性、あるいはファシズムが称揚する男らしさをヘゲモニックな男性性の具体例としてあげている。ただし、これらは具体例としてごく簡単に触れられるだけで、それらのヘゲモニーの根拠については論じられていない。彼女が経験的にヘゲモニックな男性性について本格的に論じるようになるのは、先に紹介した“*Masculinities and Globalization*”(Connell 1998)以降である。コンネルはこの論文で、トランスナショナルなビジネスマンの男性をグローバル化が一層進展した世界におけるヘゲモニックな男性性であると仮定し(Connell 1998)、その後、この男性性を体言していると想定される多国籍企業のマネジメント層にいる男性たちへのインタビュー調査を行っている(Connell and Wood 2005)。ここで問題なのは、コンネルがヘゲモニックな男性性の操作的定義

を明確にしないまま調査を行っていることだ。その結果、人びとの同意や支持といった根拠がほとんど示されないまま、トランスナショナルなビジネスマンの男性性がヘゲモニックであると認定されてしまっている。反対に、「ローカルな男性性のヘゲモニックな形式は、典型的にはその地域での資本主義のパターンと統合されていた」(Connell and Wood 2005: 348) といった理論的な認識をもとに、トランスナショナルなビジネスマンの男性性がヘゲモニックであると理解されている。

この問題をクリスティン・ピースリーは、当初は「特定の統治の形式への大衆的なあるいは大規模な同意を保証する文化的／道徳的リーダーシップ」(Beasley 2008: 88) を指し示していたヘゲモニックな男性性概念が、経験的研究が展開されるなかで、『『支配的』(もっとも強力な／もっとも広がった) 男らしさの形式を指す記述的な単語、そして最後には『実際の男性集団』を具体的かつ経験的に指し示すもの』(Beasley 2008: 88) とずれていってしまったと論じる。確かにConnellは、多国籍企業の男性経営幹部が体现するとされるトランスナショナルなビジネスマンの男性性が、それが人々から理想や常識として支持されているからではなく、現に彼らが(往々にして経済的な意味で)支配的な地位にいることを理由に、ジェンダーの観点においてもヘゲモニックであると結論づけている。ここで問題となっているのはトランスナショナルなビジネスマンの男性性がヘゲモニックな男性であるかどうかという事実判断ではない。重要なのは、トランスナショナルなビジネスマンの男性性がヘゲモニックであるとする根拠が、それに対する人々の同意や支持にではなく、経済的な配分構造に置かれている点である。しかし、実際には男性性間の階層関係はジェンダー以外の社会構造によってのみ決定されるものではない。例えば、国際的な会計事務所の幹部は「彼らが幅広く受け入れられた制度的権力を行使している点とともに、おそらく(男性による女性の) 支配と結びついた特定のパーソナリティーをもってさえいるという点から支配的な男性性を表象している」(Beasley 2008: 90)。しかしながら、言説や表象としての会計士は「すべての男性が熱望するであろう男らしさの動員のモデルとはほとんどみなされていない」(Beasley 2008: 90)。つまり、実際の会計士がジェンダー化された権力を行使することはあっても、人々の間で共有された会計士についての言説や表象が、そのことを正統化することはないとピースリーは考えているのだ。反対に、実際の労働階級男性が制度的権力を行使することはなくとも、「力強い労働者階級的な男らしさは、男として見なされるものに関する階級を超えた認識と連帯を生み出す動員のため文化的理想として一般的に用いられる」(Beasley 2008: 90)。

このような議論はConnellが提起した男性性の階層モデル自体に問題があることも示唆する。このモデルにおいてはあらかじめ、労働者階級男性や黒人男性と結びつけられた男性性が周縁化されたものとして位置づけられてしまっている。Connellはこれら周縁化された男性性が、身体的な力強さなどヘゲモニックな要素をもつことがあるとも論じているが、同時に、これらの男性性が「権威」の観点から「脱権威化」されているとしている(Connell [1995]2005)。つまり、男性性の階層モデルにおいては、ジェンダーとは別の基準による男性性間の序列があらかじめ導入されてしまっているのだ。

また、この論点は多元的変動社会たる現代社会の現状と照らし合わせて検討されるべきである。ジェンダー関係の正統性や男性性の配置のあり方は多元的変動社会において複雑化しており、それらが何らかの社会構造によってほとんど決定されていると考えるのは非現実的である。さらに、多元的変動社会において何がヘゲモニックな男性性であるかを判断することは容易なことではな

い。例えば、先に確認したように、現代日本社会における性別分業に対する人々の賛否は拮抗している。仮に賛否それぞれをサラリーマン的男性性と家事・育児する男性像とに結びつけて考えた場合、どちらがより多く人びとの支持を集めていると言えるだろうか⁽⁹⁾。おそらくそれは社会のどのような点に注目するかによって大きく異なってくるだろう。政府や自治体、さらに一部の企業は少なくとも建前上は男性の家事・育児を推進しようとしているが、その足かせとしてしばしば指摘される長時間労働が改善される兆しは見えない。また、各種メディア上にて家事・育児する男性像を確認することはごく簡単なことである。言説・表象のレベルでは家事・育児する男性像はすでに市民権を得たと言えるかもしれない。しかしながら、例えば結婚市場において、男性の稼得能力と家事・育児能力どちらが優先されるかは明らかだ。もちろん、コンネルが繰り返しのべるように完璧なヘゲモニーなど存在しえない (Connell [1995]2005)。成功した支配構造もそれが人々の同意や支持に根ざすことで正統性を担保している以上、転覆の可能性は常に存在する。ゆえに、ある男性性への否定的な評価が存在すること自体はそのヘゲモニーを否定することには必ずしもつながらない。しかしながら、どのレベルまで人々が支持や同意をしていればそれをヘゲモニックであると言えるのか、その基準がはっきりとしないのだ。にもかかわらず、何らかの男性性をヘゲモニックであると判断するには、コンネルがそうしたように人々の同意や支持などを後景に追いやり、経済的な構造など客観的に把握しやすいものをその基準として召還するしかない。そしてこのコンネルの構造決定論的傾向は男性性間の関係性に対する関心に比して、男女間の関係性への関心が後景化してしまうという弊害を生み出している。

2.2.3 男女間の関係性の後景化

コンネルの経験的な研究においては男性がどのような男性性を実践しているかについては大いに議論されるが、女性の経験についてはほとんど議論されることがない。還言すれば、男性性間の関係性についての関心と比較して男女関係への関心が相対的に弱い。その結果、人びとの様々な男性性への意味づけを通じて具体的にどのようなジェンダー関係が正統化されているのかは明らかにされないままとなっている。コンネルは、人びとの男性性に対する意味づけを等閑視することで、男性性間の関係性が男性による女性の支配も含むジェンダー関係一般へと転化する様を捉え損なっている。仮にトランスナショナルなビジネスマンの男性性がヘゲモニックな男性性であるとして、それは何を正統化しているのだろうか。コンネルの議論においてはこの点についての言及はほとんどない。

デメトリクス・ドミトリューによれば、このようなコンネルの経験的研究における傾向は、彼女の理論モデルが、ヘゲモニックな男性性とそれ以外の男性性の関わりを十分に捉えきれていないために生まれている (Demetriou 2001)。そもそもドミトリューは、コンネルが「ジェンダー内の関係性がジェンダー間の関係性の中心に置かれており、ジェンダー間の関係性からジェンダー内の関係性を解釈できると主張する単一の理論的原理を形成したこと」(Demetriou 2001: 343) に、その男性性研究ないしはジェンダー研究に対する貢献を見て取る。つまりドミトリューは、コンネルが男性性間の支配関係 (「内部的ヘゲモニー (internal hegemony)」) の男女間の支配関係 (「外部的ヘゲモニー (external hegemony)」) との関係を論じようとしていることを「フェミニスト原理 (feminist principle)」(Demetriou 2001: 343) と呼び、高く評価する。しかしながら、同時にドミトリューは、コンネル理論を2つの観点から批判する。1つは内部的ヘゲモニー

と外部的ヘゲモニーの関係性が不鮮明であること、もう1つは内部的ヘゲモニーにおいて、ヘゲモニックな男性性とその他の男性性が対立し合い、全く関係を持たないものとして捉えられていることである (Demetriou 2001)。そして、ドミトリューは内部的ヘゲモニーの二項対立的な把握こそが、それが外部的ヘゲモニーへと転化する方法をコンネル理論が捉え損ねていることの理由だと考えている。つまりドミトリューは、コンネルが内部的なヘゲモニー闘争を経て成立するものを「従属的なものと周縁化されたものからははっきりと一線を画するヘゲモニックな男性性」(Demetriou 2001: 346) と想定してしまっていると批判している。そこでの両者の関係性は、相互作用的というよりも「ヘゲモニックな男性性が非ヘゲモニックな男性性を従属化したり、周縁化することによってのみ関わる」(Demetriou 2001: 346) といったものである。ドミトリューによれば、「内部的ヘゲモニーのプロジェクトは、コンネルのフェミニスト原理の議論とは矛盾して、それ自体が目的となっている」(Demetriou 2001: 346)。

このようなコンネル評価を踏まえドミトリューはヘゲモニー概念の起源であるグラムシの議論に立ち返って、男性性間関係性とそれらが男性による女性の支配へと転ずる方法について再考する。ドミトリューによれば、コンネルが取りこぼしているのは内部的なヘゲモニーの「弁証法的プラグマティズム (dialectical pragmatism)」(Demetriou 2001: 345) である。弁証法的プラグマティズムとはヘゲモニックな男性性が従属的な男性性や周縁的な男性性の要素を自らに流用することによって男性による女性の支配を維持することを指している (Demetriou 2001)。例えば、それは異性愛男性がゲイ的な男性性を流用して、女性を含む周囲からの評価を獲得することなどを指す。ドミトリューによれば「ヘゲモニックな男性性は純粋な白人あるいは異性愛の実践の形態なのではなく、家父長制の再編成を確かにする目的で様々な男性性に由来する実践を融合させたハイブリッドなブロック」(Demetriou 2001: 337) なのだ。

ドミトリューの以上の議論は、多元的変動社会たる日本社会にとっても適格的であろう。男性による家事・育児を例に考えてみよう。この数十年間の中で男性による家事・育児に対する評価のあり方は大きく変わった。例えば、1985年に東京都田無市(当時)において、労働基準法が女性に認めた育児時間を男性職員にも認める条例の成立が図られたところ、市民から批判が殺到し、ついには自治省(当時)や東京都から時期尚早と批判されるに至った(読売新聞 1985.2.8朝刊東京都版、1985.3.12朝刊東京都版)。ところが、その数年後には育児休業法が成立し、男性労働者にも育児休業が認められることになった。特に2002年以降は男性の育児休業取得率の数値目標が掲げられるまでになっている(厚生労働省 2002)。近年では魅力的な男性を指す「イケメン」という語をもじって育児に積極的な男性を「イクメン」と呼ぶ風潮もある(イクメンクラブ 2013)。ここでは男性が育児をすることを「イケてる」ことだとする価値転換が図られている。この際、注目すべきは男性の家事・育児が、サラリーマンの男性性において男らしさと強く結びつけられてきた仕事と矛盾するものとは必ずしも捉えられていない点である。むしろ、「家事・育児の出来る男は仕事も出来る」といったように両者はしばしば結びつけられている⁽¹⁰⁾。換言すれば、仕事と男性性の結びつきを維持したまま、あらたに家事・育児と男性性が結びつけられようとしている。これは、「本質的階級 (fundamental class) が継続的に同盟集団と弁証法的に相互作用し、特定の歴史状況において支配のプロジェクトに実際的に有用かつ建設的なものを流用する」(Demetriou 2001: 345) という弁証法的プラグマティズムの一例と解釈できるだろう⁽¹¹⁾。このように多様な価値観が併存する多元的変動社会においては複数の男性性が対立しあうだけで

なく、相互に作用し合うといったことが起こると考えられる。このような視点は、それを体現する人びとの経済的な優位性からトランスナショナルなビジネスマンの男性性をヘゲモニックであるとするような議論からは生まれ得ない⁽¹²⁾。

これまで見てきたように、ジェンダー以外の構造的要因が男性性間の配置を先験的に措定することは、多元的変動社会としての現代日本社会を分析する上で、足かせとなってしまふ。また、人びとの男性性についての意味づけを等閑視することは、男性性間の関係性を観点から捉えることを妨げてしまふ。ジェンダー以外の社会構造の規定力に関心を払いながらもジェンダー関係の有り様を先験的に措定することなく、男性性間のヘゲモニー闘争の様相に光をあてる必要がある。次章ではその際の具体的な調査研究上の指針について検討する。

3 多元的変動社会における男性性間のヘゲモニー闘争

本章では、前章で指摘したコンネルにおける「男性性の階層関係の先験的な措定」という特徴と、それが生み出す「男女間の関係性の後景化」という弊害を乗り越えるための調査研究上の指針について論じる。まずはコンネルの構造決定論的傾向を乗り越えるために、調査研究の焦点をヘゲモニックな男性性から男性性間のヘゲモニー闘争へと当て直すという指針を示す。次に、コンネルの議論では等閑視されていた男性性の配置とそれへの人びとの意味づけのあり方がどのようなジェンダー関係を正統化するのかという点を捉える方法について、コンネル自身のジェンダー関係の多元性に関する議論を参照しながら論じる。

3.1 「ヘゲモニックな男性性」から「男性性間のヘゲモニー闘争自体の分析」へ

これまで本稿では、「男性性の階層関係の先験的な措定」と「男女間の関係性の後景化」の2点について検討することで、コンネルがヘゲモニックな男性性の操作的定義を不明瞭にしたまま、ジェンダー以外の社会構造によって男性性の配置が決定されるかのように論じていることを明らかにした。

日本の男性性研究では、主に何がヘゲモニックな男性性であるか、そしてそのような男性性を体現する人びと（主に男性）はどのようなジェンダー実践を行っているのかということに関心を向け、複数の男性性間関係性が男女間の支配の正統化にどのように関わるのかということへの関心は相対的に弱かった（川口 2007, 2011）。そして、同様の傾向はコンネルの経験的研究にも見て取れる。前章にて確認した通り、コンネルの経験的研究ではヘゲモニックな男性性は経済的な構造によって決定されるかのように論じられてしまっており、女性も含めた人びとがどのような男性性を理想や常識として受け入れ、そのことによって支配の正統性が確保されているかには十分な関心が向けられていない⁽¹³⁾。

この問題を乗り越えるには今一度、男性性研究の問題関心を男性性間のヘゲモニー闘争それ自体に向け直す必要がある。すなわち男性性間のヘゲモニー闘争の結果としてのヘゲモニックな男性性ではなく、そのプロセス自体を分析するという指針をたてるのである。男性性間のヘゲモニー闘争のプロセスに関心を向けるということは、様々な実践のパターンが「男性」というジェンダー・カテゴリーと結びつけられ、そして女性を含む人びとから意味づけられていくプロセスを分析することを意味する。これまでの男性性研究は、男性性間の階層的関係において頂点にたつものが

何であるかに関心をむけるがあまり、複数の男性性の関係性が意味づけられることでジェンダー構造が再編成される様を等閑視してきたのではないだろうか。ヘゲモニックな男性性からヘゲモニー闘争それ自体に関心を向け直すことで、多元的変動社会においては何がヘゲモニックな男性性を判断しづらいという問題を乗り越えることができ、また、男性性間の配置からジェンダー構造を分析することが可能となる。

この背景には、2章で確認したように多元的変動社会においては、複数の男性性が相互に作用しあっており、何がヘゲモニックであるか判断するのが困難であるという時代認識とともに、男性性研究の本来の目的がある。男性性研究の本来の目的とは、男性による女性の支配を含む社会におけるジェンダー関係を男性性の視点から分析することである。コンネル理論の優れている点は、ドミトリューが論じる通り、支配が被支配者を含む人びとからの同意を通じて正統なものとしてされていると看破した点にある (Demetriou 2001)。つまり、コンネルが切り拓いてきた男性性研究が男性性間の関係性に注目するのは、言うなれば男女間の関係性を論じるためであったのだ⁽¹⁴⁾。

3.2 ジェンダー構造の多元性と男性性間のヘゲモニー闘争

次に、男性性の配置とそれへの人びとの意味づけのあり方が、どのようなジェンダー関係を正統化するのかという点について論じる。前節で主張したように、男性性研究はある特定の男性性の配置のあり方が、どのようなジェンダー関係を正統化しているのかを検討しなければならない。しかしながら、コンネルの経験的研究においては、トランスナショナルなビジネスマンの男性性のヘゲモニーの根拠は十分に示されず、また、トランスナショナルなビジネスマンの男性性がどのようなジェンダー関係を正統化しているのかも議論されていない。日本社会を対象とする研究においても同様の問題が確認される。男性性とジェンダー関係をめぐる経験的研究においては、様々な男性性に対して人びとがどのような意味づけを施しているのかを明らかにすると同時に、それに基づき構成される男性性の配置のあり方がどのようなジェンダー関係を正統化しているかについても取り組む必要があるだろう。

この際、コンネル自身が提起したジェンダー構造を多元的に捉える視点が調査研究上の指針となるだろう。そもそも、コンネルの議論では男性性の配置によって正統化されるのは「男性の支配的な位置と女性の従属的な位置」あるいは「家父長制」と考えられている (Connell [1995] 2005: 77)。しかしながら、一口に男性の支配的位置と女性の従属的な位置といっても、社会におけるその具体的な現れ方は多様であろう。コンネル自身もジェンダーの社会理論について論じるなかで旧来の家父長制理論のあいまいさを批判している (Connell 1987=1993)。

これに対し、コンネル自身が提唱しているのがジェンダー構造の多元性である。第2章で論じた通り、コンネルは (経験的研究においては彼女自身も同様の限界を抱えているが) これまでのジェンダーの社会理論が、何らかの形で既存のジェンダー関係のパターンを生み出す究極的かつ単一の原因を措定したと批判している (Connell 1987=1993, 2002=2008)。これに対し、彼女は構造化されたジェンダー関係が2つの意味で多元的であることを指摘する。第1に、ジェンダー関係は空間的な、あるいは領域的な意味で多元的である。コンネルによれば、複雑化した社会におけるジェンダー関係は、制度や組織によって異なる仕方で構造化されている (Connell 1987=1993)。そこで、社会全体に通底するような基底的な形で構造化されたジェンダー関係を

ジェンダー秩序、部分社会における構造化されたジェンダー関係をジェンダー体制と呼びわける (Connell 1987=1993)。その結果、例えば全体としては大きな男女間の格差が確認できる日本社会において、教育領域では女性の高等教育を受ける割合が男性と同程度になるなど比較的、ジェンダー平等的であるのに対し、労働領域では男女間の賃金格差が大きいなど、よりジェンダー不平等的であるといった現象をうまく説明できるようになる。つまり、全体社会 (ジェンダー秩序) と部分社会 (ジェンダー体制) を分別し、さらに部分社会間の違いも捉えることが出来る。ジェンダー体制は「一般的には全体的なジェンダー秩序に対応しているがそれに反している場合もありうる」(Connell 2002=2008: 93) とコンネルは主張している。

第2に、ジェンダー関係は、それが編成されるロジックにおいて多元的である。複数の組織や制度におけるジェンダー関係がさまざまな形をとるだけでなく、その編成のされ方にいくつかのパターンがあるということだ。コンネルは、ジェンダー関係の編成のされ方のパターンを①権力構造 ②ジェンダー化された蓄積、生産、消費 ③感情関係 ④文化、言説、象徴の四つに分類する (Connell [2002]2009)。1つ目は、一般的に家父長制と名指される主に男女間でみられるある集団が別の集団を抑圧するという権力関係とジェンダー化された言説や表象を通じて作動する権力両方を指している。2つ目は、性別分業に代表される富や労働がジェンダー化された形で配分される構造を指している。3つ目は、人々の間のジェンダー化された情緒的コミットメントのパターンを指している。性愛関係を男女間に限るような規範や男同士の絆と結びついたナショナリズムの物語などがその代表例と言えるだろう。4つ目は、ジェンダー化された意味の体系を指している。これらの4つの構造は、人々に別々の現象として経験される訳ではない。むしろ一つの現象において、複数のロジックによってジェンダー関係が編成されている。先に確認したジェンダー秩序とジェンダー体制の分別が、ジェンダー関係の編成がなされる水準に依拠した分類であるのに対し、これら4構造の区別はジェンダー関係が編成されるロジックに基づくあくまで分析的なものであり、「実際には、それらは常に混ざり合い、相互作用している」(Connell 2002=2008: 117) と考えられる。

コンネルは、「それぞれの論理を追うことによって、非常に複雑な現実の理解が容易になる」(Connell 2002=2008: 117) と述べているが、男性性の配置についての人々の意味づけがどのようなジェンダー関係を正統化するかを把握する時にも同じことが言えるであろう。ジェンダー秩序とジェンダー体制を分別すること、また複数のジェンダー体制を比較することで、全体社会や部分社会における複雑な男性性の配置のあり方およびジェンダー関係のあり方を理解しやすくなるだろう。あるいはジェンダー構造を4つにわけて理解することで、「家事・育児する男性像」の登場は2番目と4番目の構造に関わっているという風に、その男性性がジェンダー構造で占める範囲をより正確に理解できるようになるだろう。

以上のように、コンネルの議論の「男性性の階層関係の先験的な措定」と「男女間の関係性の後景化」という特徴が生み出す多元的変動社会を分析する上での限界については、調査研究の焦点をヘゲモニックな男性性からヘゲモニー闘争それ自体へとずらすという指針と、ジェンダー構造を多元的に捉えるという指針を採用することで、乗り越えられると考えられる。

4 おわりに

未だ日本においては低調な男性性の視点からのジェンダー分析にとって、Connellの議論がもつ「複数の男性性のヘゲモニー闘争を通じたジェンダー構造の正統化」という視点は極めて有用である。しかしながら、これまで論じてきた通り、具体的な経験的研究を行う段になると、その理論の限界が露わになる。その限界に対し、本稿では調査研究の焦点をヘゲモニックな男性性からヘゲモニー闘争それ自体へとずらすという指針と、ジェンダー構造を多元的に捉えるという指針を採用することを提案した。

日本の男性性研究は、Connell理論に依拠することで、これまで光のあたることの少なかった男性性の問題系を分析することに成功した。また、ヘゲモニックな男性性概念を用い、サラリーマン的男性性という観点からジェンダー関係を捉え直そうとしてきた。しかしながら、まさにそのConnell自身が抱える限界から、この作業はいまだ不十分なままにとどまっていると言わざるを得ない(川口 2007, 2011)。先にあげた2つの指針を採用することで、男性性の配置に対する人びとの意味づけを通じたジェンダー構造再編成の分析を今後の課題としたい。

注

- (1) 本稿において、「男性性」とは単なる男性役割やジェンダー規範だけでなく、より広く「男性」というジェンダー・カテゴリーに関わる「ジェンダー関係によって構造化された実践の配置 (configuration)」(Connell [1995]2005: 44) を意味する。
- (2) 本稿ではConnellの「configuration of masculinities」(Connell [1995]2005) という概念を「男性性の配置」と訳す。これは、複数の男性性が人びとに異なって意味づけられることで生まれる関係を指している。のちに確認するようにConnellは、これをある男性性による別の男性性の支配と捉えているようである。
- (3) 例えば、アメリカ社会では特定の黒人アスリートが社会においてヘゲモニックな男性性とされる要素の多くを体現していると考えられる。しかしながら「スター個人の名誉や富に黒人男性一般に社会的権威をもたらすようなトリクルダウン効果はない」(Connell [1995]2005: 81)。アスリートが体現するヘゲモニーはあくまでその個人のものであって、黒人であることは周縁化されたままであるとConnellは考えているのだ。
- (4) もちろんConnellは男女間の支配関係を純粋に文化的なものとしてとらえているわけではない。むしろ、彼女は支配の物質的基盤を重要視し、「言説的なアプローチは重大な限界を抱えている。それらでは経済的不平等と国家の問題を捉えることができない」(Connell [1995]2005: xix) と論じている。
- (5) ただし、グラムシはヘゲモニー概念を資本家階級による労働者階級の支配との関連においてのみ捉えていたわけではない。むしろ、その議論においては、ヘゲモニー概念自体は政治的に中立であり、労働者階級がヘゲモニーを獲得し、プロレタリアート独裁が実現する可能性も担保されている(グラムシ 1978, 1994)。このことを踏まえるとジェンダーについて論じる際にも、ヘゲモニーをもっぱら男性による女性の支配の問題としてのみ捉えることについて検討する必要があるかもしれない。しかし、この論点は本稿の射程を大きく超えるため、今後の課題としたい。
- (6) Connellは、*Masculinities* において、常勤職からあぶれた労働者階級の若年男性、フェミニストと協働する男性、男性同性愛者、科学技術の変化に直面している中産階級の男性の4つの男性集団のライフヒストリーを収集、分析している(Connell [1995]2005)。また、*The Men and the Boys* においてはスポーツと男性性、労働者階級男性の間の同性愛的欲望、学校での男性性のヒエラルキー、健康と男性性といったテーマについて

て調査を基に検討している (Connell 2000)。

- (7) 1973年の第1回から2003年の第7回までのすべての調査で実施された質問は54問にのぼり、「基本的価値」「経済・社会・文化」「家族・男女関係」「政治」の4領域に分類される (NHK 放送文化研究所 2004)。これら54問について1973年と2003年の差の絶対値を領域ごとに平均し変化量としたものをみると、それぞれ7.2%、4.4%、5.8%、11.1%、8.4%となる (NHK 放送文化研究所 2004)。ここから「家族・男女関係」に関する意識が、他の領域よりも顕著に変化していることがわかる。
- (8) このような若い世代における性別分業に賛成する人々の増加傾向はその他の調査においても確認されている。例えば内閣府の2012年の調査では20代で性別分業に賛成する人の割合が、2009年の調査に比べて19.3%も伸びている (内閣府 2012)。
- (9) 「家事・育児する男性像」をヘゲモニックな男性性であるとするには2つの点から慎重な議論が必要となる。第一に、注5で示したように、男女平等にかなうような男性性のあり方もヘゲモニックな男性性と呼べるのかどうかという点についての議論が必要である。第二に、「家事・育児する男性像」が人びとから支持を集めることによって、既存のジェンダー秩序が延命するということも考えられる。例えば、ドミトリューは「Queer Eyes for the Straight Guy」というテレビ番組を事例に、近年のアメリカ社会において、異性愛的男性性が、ファッションにこだわるといったかつては男性同性愛者的とされた行為を取り込むことにより、異性愛体制を延命していると論じている (Demetriu 2001)。2003年から米国で放送されている「Queer Eyes for the Straight Guy」は、ファッション、ヘアスタイル、フード/ワイン、カルチャー、インテリア・デザインをそれぞれ専門とする5人のオープンリー・ゲイが異性愛男性をファッションブルに改造するという内容であり、より魅力的になった男性が妻や恋人を驚かせるシーンが番組のハイライトである。男性の家事や育児においても、それが新たな「男らしさ」のあり方とされたり、男女間の体力差などを根拠に男性こそが育児に向いているといったように主張されることは当然予想される。これらは男女の二分法を強化するという意味で、既存のジェンダー秩序の再生産の1つのあり方と言えるだろう。
- (10) 例えば、厚生労働省のイクメンプロジェクトが発行した『父親のワークライフバランス WLB HANDBOOK』では「子育ては、仕事にもメリット!」として育児が仕事に良い影響を与えたという男性たちの体験談が紹介されている (イクメンプロジェクト 2013)。
- (11) グラムシの用語である「本質的階級」はマルクスにおける「即時的階級」に対応する (鈴木 2006)。
- (12) コンネルはメッサーシュミットとともにこの批判に反論している (Connell and Messerschmidt 2005)。しかし、そこで争われている論点は本稿の主題とは直接関わらないので、ここでは紙幅の関係上、その再反論は検討しない。なお、多賀太 (2010) がこの論争を整理しているので参照されたい。
- (13) このような問題が起きた理由には、おそらくコンネルがジェンダー構造の正統化をヘゲモニックな男性性とのみ関連づけていることも関係している。人びとがある実践を「男性」というカテゴリーと結びつけ、さらにそれに何らかの文化的評価を下す際、その評価がその男性性だけに行われるばかりではない。むしろ、そのような評価は複数の男性性の関係性にたいして体系的に行われることも多いのではないだろうか。例えば、須長史生は男性の「ハゲ」がどのように人びとに意味づけられるかを分析した研究の中で、そのような男性たちの周囲にいる人びとが「からかい」を通じた「男らしさのテスト」を行うことを明らかにした (須長 1999)。毛髪の少ない男性は、そのことへのからかいを「男らしく」堂々と受け流す必要がある。なぜなら、建前上は、毛髪が少ないことではなく、そのことを気にしていることだが問題だとされているからだ。男性の外見に関連して、毛髪の少ないことは明らかに否定的なものとして意味づけられているにもかかわらず、そのような外見を気にすることが「男らしくない」とすることで、身体的特徴をあげつらっていることが巧

妙に隠蔽されている。つまり、ここではある特定の外見やそのような外見を気にすることへの否定的な意味づけを通じて、逆説的に「堂々とした」振る舞いが「男らしい」ものとして意味づけられている。このようなプロセスを通じて、「男らしさ」と「女らしさ」というジェンダーにまつわる文化的な構造が再編成されている。

- (14) コンネル自身、「私の理論的関心は全体としてのジェンダー秩序にあり、男性性はそのジグゾーパズルの1つのピースである」(Connell 2013)と述べている。

参考文献

- Beasley, Christine, 2008, "Rethinking Hegemonic Masculinity in a Globalizing World," *Men and Masculinities*, 11 (1): 86-103.
- Connell, R.W., 1983, *Which Way is Up?: Essays on Sex, Class, and Culture*, Sydney: Allen & Unwin.
- , 1987, *Gender and Power*, Cambridge: Polity Press. (= 森重雄・加藤隆雄・菊地栄治・越智康詞訳、1993、『ジェンダーと権力——セクシュアリティの社会学』三交社.)
- , [1995]2005, *Masculinities 2nd edition*, Berkeley: University of California Press.
- , 1998, "Masculinities and Globalization," *Men and Masculinities*, 1(1): 3-23.
- , 2000, *The Men and the Boys*, Berkeley: University of California Press.
- , 2002, *Gender: Short Introduction*, Cambridge: Polity Press. (= 多賀太監訳、2008、『ジェンダー学の最前線』世界思想社.)
- , 2002 [2009], *Gender: Short Introduction 2nd edition*, Cambridge: Polity Press.
- , 2013, "Masculinities," *Raewyn Connell Homepage*, (Retrieved January 15, 2013, <http://www.raewynconnell.net/>).
- Connell, R.W. and James W. Messerschmidt, 2005, "Hegemonic Masculinity: Rethinking the Concept," *Gender & Society*, 19(6): 829-859.
- Connell, R.W. and Julian Wood, 2005, "Globalization and Business Masculinities," *Men and Masculinities*, 7(4): 347-364.
- Dasgupta, Romit, 2012, *Re-reading the Salaryman in Japan: "Crafting" Masculinities*, New York: Routledge.
- Demetriou, D.Z., 2001, "Connell's Concept of Hegemonic Masculinity: A Critique," *Theory and Society*, 30(3): 337-361.
- グラムシ、アントニオ著・石堂清倫訳、1978、『グラムシ獄中ノート』三一書房。
- グラムシ、アントニオ著・上村忠男編訳、1994、『新編 現代の君主』青木書店。
- イクメンクラブ、2013、イクメンクラブホームページ、(2013年7月8日取得、<http://www.ikumenclub.com>)。
- Hidaka, Tomoko, 2010, *Salaryman Masculinity: The Continuity and Change in Hegemonic Masculinity in Japan*, Leiden: Brill Academic Publications.
- イクメンプロジェクト、2013、『父親のワークライフバランス WLB HANDBOOK』厚生労働省イクメンプロジェクトホームページ、(2014年3月27日取得、<http://ikumen-project.jp/pdf/handbook.pdf>)。
- 川口遼、2007、「男性学における当事者主義の批判的検討」『Gender & Sexuality』3: 23-42.
- 、2011、「男性性間の階層的関係とジェンダー秩序——ヘゲモニックな男性性概念の再検討」『女性学』19: 110-116.
- 厚生労働省、「少子化対策プラスワン (要点)」、厚生労働省ホームページ、(2013年7月8日取得、<http://www>).

mhlw.go.jp/houdou/2002/09/h0920-1.html).

宮下さおり、2006、『戦後日本における男性単独稼得規範の普及に関する一考察』一橋大学大学院社会学研究科
2005年度博士論文.

内閣府、2012、『男女共同参画社会に関する世論調査』内閣府大臣官房政府広報室.

NHK 放送文化研究所編、2004、『現代日本人の意識構造 [第六版]』日本放送出版協会.

——、2010、『現代日本人の意識構造 [第七版]』日本放送出版協会.

Roberson, James E., 2005, "Fight!! Ippatsu!! : "Genki" Energy Drinks and the Marketing of Masculine Ideology in
Japan," *Men and Masculinities*, 7(4): 365-384.

須長史生、1999、『ハゲを生きる』勁草書房.

鈴木富久、2006、「グラムシの階級概念と主体の論理」『桃山学院大学社会学論集』39(2): 29-49.

多賀太、2001、『男性のジェンダー形成——「男らしさ」の揺らぎのなかで』東洋館出版社.

——、2006、『男らしさの社会学——揺らぐ男のライフコース』世界思想社.

——、2010、「男性性というジェンダー」井上俊・伊藤公雄編『近代家族とジェンダー』世界思想社、177-186.

田中俊之、2009、『男性学の新展開』青弓社.

[学外研究者による査読を含む審査を経て、2014年5月28日掲載決定]

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)